

18世紀初頭に修復された被災古墳

——埼玉県坂戸市浅羽野1号墳の事例から——

櫻井 準也

The Disaster Ancient Tumulus Restored at the Beginning of the 18th Century:

A Case Study of Asabano No.1 Kofun at Sakado City, Saitama Prefecture

SAKURAI, Junya

Abstract

In this paper, I introduce Asabano No.1 Kofun (Tsuchiya jinja Kofun) in Sakado city, Saitama Prefecture which was built in the 7th century and the stone chamber was restored at the beginning of the 18th century (Edo period). It has become clear that it was restored by the masonry of Takato, Shinshu (Nagano Prefecture) in 1707, by the inscription of a ceiling stone of the stone chamber. Although the example where the ancient tumulus was restored in the past exists in our country, this is a very new example. One reason is that the restoring age and masonry name have become clear, and another reason it that the construction stone was reused for stone statue. Moreover, it is important also that the damage of the stone chamber caused by the seismic hazard which had occurred frequently those days became an opportunity of restoration. Thus, this is an interesting example which can know the relation between ancient tumulus and people of the Edo period, and also the relation between archaeological site and natural disaster.

要 約

本稿では7世紀に築造され、18世紀初頭（江戸時代）に石室が修復された埼玉県坂戸市の浅羽野1号墳（土屋神社古墳）の事例を紹介する。この古墳では天井石に残された銘文によって1707年に信州高遠の石工によって石室が修復されたことが判明している。古墳が過去に修復された事例はわが国に存在するが、本事例は極めて珍しい事

例である。その理由は修復の時期や石工名が判明していること、そして石材が転用されて石像が製作されたことである。また、修復の契機となったのが当時頻発していた地震災害による古墳の被害であることも重要な点である。このように、本事例は古墳と江戸時代の人々の関係、さらには遺跡と自然災害の関係を知ることができる興味深い事例である。

キーワード

浅羽野1号墳 (Asabano No.1 Kofun)、18世紀初頭 (the beginning of the 18th century)

石室修復 (Stone chamber restoration)

地震災害 (Seismic hazard)、高遠石工 (the masonry of Takato)

はじめに

古墳や城郭のように築造されたのち長期間にわたって地域景観の一部となり後世に継承された構造物だけでなく堅穴住居のように地中に埋没した遺構もその後に生じた様々な原因（人為的な破壊・転用や自然災害）によって改変されてきたが、自然災害の一つである地震による遺跡の被災の事例は特に多く、地震国であるわが国では発掘調査を実施していると地震災害に遭った遺構を調査することは稀なことではない。1980年代前半までは発掘担当者に遺跡に地震の痕跡が残っているという意識が欠けていたために地震の痕跡のほとんどが見逃されていたが、寒川 旭氏らの努力でわが国に「地震考古学」が徐々に定着していった（寒川1992）⁽¹⁾。

また、検出された数は少ないが地震によって破壊された遺構がその後修復されて使用されるという事例も存在する。このうち、筆者が実見した事例では神奈川県藤沢市の二伝寺砦遺跡がある。二伝寺砦遺跡は弥生時代後期の堅穴住居址20軒で構成される集落であるが、大地震に被災して地割れが生じた堅穴住居のうち2軒については段差ができた床を補修した痕跡が検出されている（上本2011）。弥生人は地震に被災した後も補修を行って住居を使い続けたのである。それ以降の時代でも被災した過去の遺構を修復するという行為が確認できる事例はみられる。その中でも地域のシンボリックな存在である古墳（高塚古墳）の修復事例については「いつ」「だれが」「なぜ」修復したか知りたいところであるが、近代以前の修復については文献記録が残っていることはほとんどない。

これに対し、地震で被災したと思われる古墳が修復され、その時期や修復した石工名も判明している極めて珍しい事例が埼玉県坂戸市の浅羽野1号墳（土屋神社古墳）である。本稿ではこの事例について簡単に紹介してみたい。

(1) その契機となったのは、寒川氏が1984（昭和59）年の地震学会で大阪府古市古墳群の誉田山古墳（応神天皇陵古墳）が活断層による16世紀の地震（規模はマグニチュード7.1程度）によって変形としたという内容の発表であった。

1. 修復された古墳

1.1 坂戸市浅羽野1号墳の概要

本稿で紹介する事例は埼玉県坂戸市に所在する浅羽野1号墳である（図1・2）。本古墳は浅羽小字宮浦559番地に位置し、土屋神社古墳とも呼ばれている。土屋神社の祭神は大山咋神で近世においては本山派修験山本坊配下の大蔵院持ちであったが、1872（明治5）年に村社となり現在は氏子によって管理されている。また、墳頂には神社の本殿があり、その北西側には埼玉県指定天然記念物の神木杉、東側には浅間社が祀られており（図3）、地元では土屋神社ではなく「お浅間さま」と呼ばれることが多い。考古学的には本古墳は高麗川右岸に立地し、浅羽野地区に点在する浅羽野古墳群の中心的な古墳である。大きさは直径が約50m、高さ4.5mの大型の円墳である⁽²⁾。なお、1992（平成4）年に実施された宮裏遺跡の発掘調査で本古墳の周溝の一部が検出されている（塩野2004）。石室内部に石棺は存在せず、副葬品や出土遺物も存在しないが古墳や石室の構造等から構築年代は7世紀初頭とされている。石室は凝灰岩の切石積みの横穴式石室で入口が南側（拝殿の裏）にあり、方向はほぼ南北に設置されている。規模は奥行4.1m、天井までの高さは2.2mを計る入間地区最大の石室である（図4）。

次に、現在の石室内部の状況は以下のようなものである⁽³⁾。まず、側壁や奥壁の一部は凝灰岩の切石が使用されているが、切石にはところどころ隙間がみられること、積み方も当初のもの



図1 坂戸市浅羽野1号墳

- (2) 古墳の形態については、西側に前方部のような張り出し部分があり帆立貝形古墳であるという指摘もされているが、年代的に合わない。また、かつて北側に陪塚群があったがすべて消滅している（坂戸市1992）。
- (3) 土屋神社氏子の方々のご厚意で2017（平成29）年の1月26日および3月2日に石室内部に入らせていただいた。



図2 浅羽野1号墳の平面図（坂戸市1992）

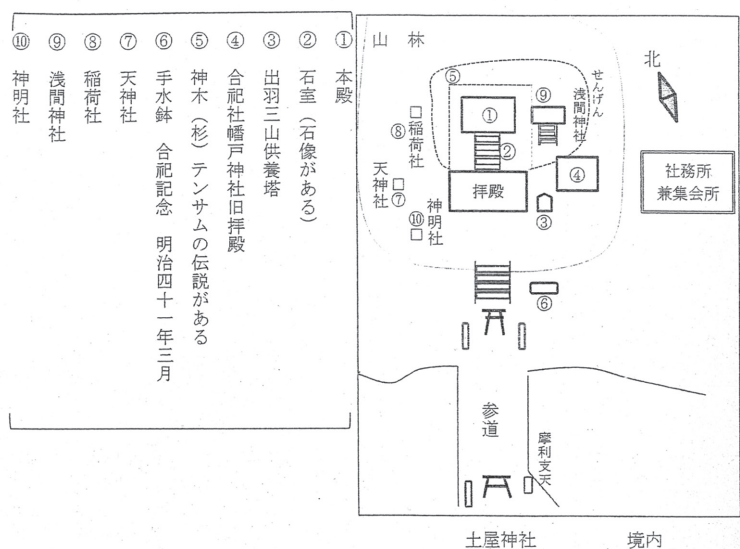


図3 境内の配置図（浅羽野の歴史を知る会2013）

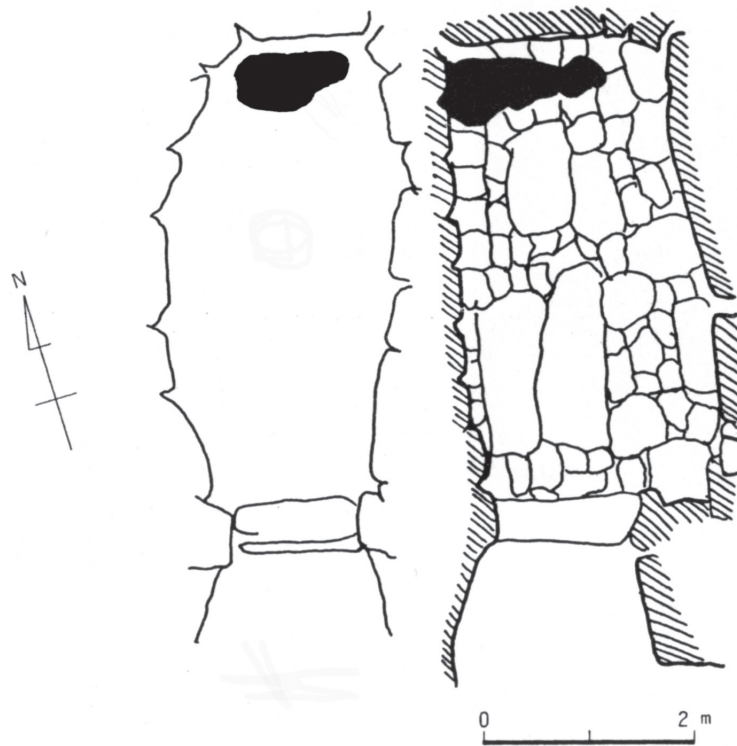


図4 石室の実測図 (坂戸市1992)

とは異なると思われる部分もあるなど修復によって切石が積みなおされている様子が窺え、その結果玄室の平面形に歪みがみられる。また、奥壁には斜めになったままの切石があり切石間に隙間がみられるが、その隙間に切石の破片やぐり石などが充填されている。さらに、側壁や奥壁の隙間や目地の部分は戦後になってコンクリートで補修されている。天井は北側が大形の凝灰岩の天井石であるのに対し、南側は2枚の板状の緑泥片岩⁽⁴⁾が横に渡されている(2枚の天井石の間に柱材が挟まっている)。また、北側の凝灰岩の天井石には大きな亀裂が入っているが、この亀裂の状況から経年劣化によるものではなく地震等によって生じたものと思われる。さらに、奥壁には緑泥片岩の一枚岩が使用され、その前に石像が置かれている(図5)。神社の御神体でもあるこの石像は通常みられるような精緻な造りではなく、頭部、胴部、腰から下の3つの部分に分かれており、現在はコンクリートで接合・補修されている。このように開口した古墳の石室内に石造物が安置され、堂などとして転用される事例は少なくないが⁽⁵⁾、この石像は粗雑な造りであり、何を表現した石像かを判断することは難しい。しかし、『埼玉県史』の「入間郡西部の古墳」で大日如来石像としているように(埼玉県1951)、頭に宝冠を着け、智拳印を結んだ大日如

(4) その長さや幅、厚さなどから中世の板碑が転用された可能性がある。

(5) 例えば、関東地方では東京都府中市熊野神社古墳の玄室内に祭壇状の石組みがあり、埼玉県小川町穴八幡古墳では玄室に石祠が安置されている(府中市郷土の森博物館2006)。



図5 石室内の石像（坂戸市1992）

来石像であると考えるのが妥当であろう。また、使用されている石材が側壁や天井石に使用されているものと同じ凝灰岩であり、背面が平坦であることから、修復の際に破損して使用できなくなった大形の天井石を再利用して石像が造られ、破損した天井石の代わりに2枚の緑泥片岩が使用されたと考えられる⁽⁶⁾。

さらに、興味深いものが北側の天井石に刻まれた銘文である。銘文は縦書きで、次のような文字が刻まれている。

(6) 古墳に使用された石材が石像に転用された事例としては、鎌倉時代以降に阿弥陀浄土教の流布とともに石棺の石材を転用した播磨国（兵庫県）の石棺仏の事例が全国的に有名であるが（石尾1999、中村2012）、関東地方では近世享保期に石棺を大日如来石塔に転用した茨城県かすみがうら市坂田古墳の事例などがみられる（千葉2005）。しかしながら、本例のように石棺ではなく石室の石材を近世に石像に転用した事例は極めて稀である。

武州入間之郡浅羽江別當大蔵院

奉修覆土屋大権現御寶前 敬白

寶永四年丁亥九月十五日 信州石屋藤沢忠兵衛

この銘文から石室は信州の石工忠兵衛⁽⁷⁾によって1707（宝永4）年9月15日に修復されたことがわかる。すなわち、本古墳の石室は現在から約300年前の1707（宝永4）年に信州の石工（高遠石工）によって修復され、おそらくその後も幾度か部分的に修復されたのち戦後になって側壁や奥壁がコンクリートで補修され現在に至っている。本古墳の石室については『坂戸市史』（坂戸市1992）に内部の写真や簡単な実測図は示されているものの（図4・5）、未だ本格的な調査は実施されていないため不明な点が多い。しかしながら、18世紀初頭という時期に地域に残されていた古墳の石室が修復され、その時期や石工名が現地に残された銘文によって判明している事例は極めて稀であり、本事例は近世における古墳と周辺に暮らす人々の関係を探ることができる貴重な事例であると言える。

1.2 文献史料の記述

浅羽野1号墳（土屋神社古墳）については近世や明治期の文献にいくつかの記述がみられる。まず、18世紀前半の文政期頃の『新編武蔵風土記稿』に次のような記述がある（蘆田編1996）。

土屋権現社 高さ一丈五尺許、四方七八間の塚の南面を深さ八尺程、高さ七尺程洞の如くに穿ち、三方は石を疊で垣とし、屋の裏には長さ一丈許、文字をも失へる古碑を東西に渡し、茅を以て覆屋を設く、内に丈二尺七八寸なる惠美瀨の如き坐像のさまを、石にて作れるものを神體として置こは何等の神にて何の頃鎮座せしや、土屋の神號も詳ならず、されど此塚上に浅間の小祠を置、傍に凡六圍の老杉一樹あり、塚のさまは疑ふべきもなき古墳なれば、昔こゝを領せし浅羽氏の墳にて彼神體は時の領主を石像とせしにや、又土屋某なんと云る人領せしこと有て、其人の石像を安じ、土屋の神號を加へしや或は土を穿てかゝる屋を設けたれば、それらの名によるにや、すべて土人の傳へを失ひたれば、今よりはそれを定むべからず、村内大蔵院の持なり。

ここでは土屋神社に関する説明の中で古墳や石室について述べられているが、「文字をも失へる古碑」は板碑に使用される緑泥片岩（秩父石）の天井石であると思われる。内部に安置されて

(7) この石工は信州高遠藩にあった藤沢郷の忠兵衛という人物であったと推定されるが、元禄期以降に信州高遠藩の高遠石工が長野県周辺の地域で石仏・石塔・石橋・鳥居・石垣などの石造物を製作していたことは周知の事実である。なお、同一人物であるか不明であるがほぼ同時期に関東地方に残された高遠石工の作品の中に忠兵衛の作品が存在する。その一つが神奈川県厚木市七沢にある観音寺の手水鉢であり、側面に石工名「信州高遠領 忠兵衛 長五郎 甚助 与茂之丞 磯右衛門 伊左衛門 甚五兵衛」および年号「正徳二年八月」とある（鈴木編1972）。また、同じ観音寺の宇賀神台石（享保7年）にも忠兵衛の名がみえる。ちなみに正徳2年（1712）は本石室修復の5年後、享保7年（1722）は15年後である。

いる石像については「恵比須」のような石像としているが、これが何の像でいつ頃安置されたかは不明であると述べている。また、この塚は疑いなく古墳であるとしているが、この古墳が浅羽氏によって築造したものかこの地を所領としていた土屋某が築造したものか地元の言い伝えも途絶えており、不明であるとしている。なお、ここには宝永年間の修復に関する記述はみられない。次に、明治初期の『武蔵国郡村誌』の「入間郡浅羽村」の項に土屋神社に関する次のような記述がある（埼玉県編1954）。

土屋社 村社々地東西十一間南北三十八間面積七百十七坪、村の中央にあり、大山祇命を祭る、神体は石造衣冠の像身長一丈七八寸なり、高一丈五尺周囲十五丈計の塚の中腹を穿ち石を礎て社殿とし此像を安置す、又一丈計の大片石を以て椀とす、宝永四年九月修復の文を彫る、其前に拝殿を建つ、祭日三月十一日、又塚の頂上に浅間社の小祠あり、祭日六月十五日、祠傍に老杉一株あり、囲五丈許、又社地中松杉の老樹各一株あり、囲一丈許なり（句読点は筆者による）

ここでは土屋神社が塚の中腹を穿いて社殿としていると記述されており、古墳であるとは明言されていないが、同時期の『大日本國誌 武蔵國』の「土屋社」の項で「…蓋シ古墳ナリ」（内務省地理局編、1988）とあるように『新編武蔵風土記稿』の記述と同様に古墳と認識されていたようである。また、修復の銘文がある「大片石」は緑泥片岩（秩父石）の天井石を示すと考えられる。このように、これらの文献史料の記述には宝永期の石室修復に関する伝承は存在しないが、その説明内容は基本的に現在の古墳や石室内部の状況と一致している。

2. 古墳修復の背景

2.1 地震と火山噴火

本稿で紹介した浅羽野1号墳（土屋神社古墳）の石室の天井石に刻まれた銘文には宝永4年（1707）9月15日の年月日が記されているが、元禄期後半から宝永期にかけての関東地方は地震と火山災害が集中した時期にあたる。具体的には、1703（元禄16）年の元禄地震、1707（宝永4）年の宝永地震と富士山宝永噴火、そして1695（元禄8）年以降活発となった浅間山の噴火である。

このうち、元禄地震（元禄関東地震）は1703（元禄16）年11月23日（旧暦）に千葉沖を震源として発生した巨大地震でマグニチュードは8.2程度、最大震度は7、津波の高さは最大17m程度（伊豆地方）と推定されている。江戸の震度は5～6程度であり、相模地方では震度7であったと推定され、地震によって房総半島が4～5m隆起している。次に、この元禄地震の直後に起こった宝永地震は元禄地震の4年後の1707（宝永4）年10月4日（旧暦）に起こった巨大地震である。震源域は東海道沖から南海道沖でマグニチュードは9前後、最大震度は7、津波の高さは最大25m程度（土佐地方）と推定されている。この地震は東海地震と南海地震が連動してほぼ同時に発生したと考えられている。江戸の震度は4～5程度であり、関東地方の被害はそれほど大きくはなかったが、翌朝には余震と思われる富士宮付近を震源とする宝永富士宮地震（マグニチュード7.0）が発生し、江戸でも強い揺れで被害が出ている。さらに、宝永地震の49日後には富士山

の噴火（宝永噴火）が起きており、火山灰（宝永火山灰）が南関東地方に大量に降り積もっている。また、浅間山は1669（寛文9）年以降噴火は起こっていなかったが、1695（元禄8）年になって久々に噴火し、宝永期になると1704（宝永元）年、1706（宝永3）年、1708（宝永5）年、1709（宝永6）年、1710（宝永7）年と毎年のように噴火を繰り返しており、この傾向は1733（享保18）年まで続いている。

このように、元禄地震、宝永地震、富士山宝永噴火、一連の浅間山の噴火と18世紀初頭の関東地方は立て続けに地震や火山災害に遭っている。その中でも埼玉県坂戸市に所在する浅羽野1号墳（土屋神社古墳）に被害を与えたと考えられる自然災害は関東地方の被害が大きかった元禄地震である。また、石室内の天井石に刻まれた修復の年月日（宝永4年9月15日）は1707（宝永4）年10月4日の宝永地震の直前の日付となっているが、この日付通りであるとする则本古墳は1703（元禄16）年の元禄地震で被害に遭ったと考えられる石室を修復した直後に再び宝永地震で被災したことになる。そのため、記録は残されていないが本古墳ではその後も修復が実施された可能性がある。

2.2 古墳に対する意識

本稿で紹介した坂戸市浅羽野1号墳（土屋神社古墳）が修復されたのは1707（宝永4）年のことである。また、この修復の15年前にあたる1692（元禄5）年には徳川光圀によってわが国初の学術的発掘調査とされる下野国の上車塚（上侍塚）や下車塚（下侍塚）の測量や発掘調査が実施され、出土遺物は図化されたのち木箱に納めて埋め戻されている。このように、古墳が修復され、わが国の考古学史に残る発掘調査が実施される一方で、当時は新田開発などによって各地の古墳が破壊され、古墳が土取りや石取りの場となり、さらには盗掘によって副葬品が持ち出されている（櫻井2011）。この状況は一般の古墳だけでなく陵墓にも及んでおり、1696（元禄9）年の松下見林の『前王廟陵記』の序文に「これをもって、謀って山陵を毀ちたるは、八虐の一に処す。律の原さざるところなり。…かくのごとく善政備われりといえども、賊、陵を発くこと絶えず。いわんや、皇綱紐を解くにおよびて、諸陵寮職を廢して、人をして、犁きて田園となし、壑に完き柩の無からしむるにいたる」とある。

このような状況の中で流布されたのが「古墳の祟り」に関する言説である（斎藤1932・1974、櫻井2011）。古墳に関する記述は近世を通じてみられるが、寛政年間（18世紀末）頃になり各地の地誌や名所図会などで古墳が紹介される以前の17世紀から18世紀にかけての古墳の記述には「古墳の祟り」に関する記述の割合が高いようである。さらに、この時期には古墳と天変地異を結びつける考え方もあった。例えば、古代から存在する古墳や塚の鳴動に関する記述は近世になってもみられる。1658（明暦4）年の『京童』に「將軍塚　しやうぐんづかといふは、くわんむてんわうの御とき、この京のしゅごじんとして、八尺の土偶人をつくり、くろがねのかつちうをきせ、くろがねのゆみ矢をもたせ、面体にしにむかはせたせて、この山にうづませたまへるなり。天下わがはひあるときはしんどうするなり」という將軍塚の記述（同様の記述は1787（天明7）年の『拾遺都名所図会』にもある）、1799（寛政11）年の『奇遊談』の長岡大塚の鳴動に関する記述などである。このように、天変地異の前触れとして古墳が鳴動するという考え方が近世においても存在していたことがわかる。

今回紹介した事例は、地震や火山災害が頻発した時期の関東地方において地震で被災した古墳の石室が修復され、その際に壊れた天井石で大日如来石像が製作され、その後修復された石室が加持祈祷などの場として使用されていたと推測されるものである。こうした行動の背景には、地震や火山噴火などの自然災害を恐れるとともに、古代の有力者の墓である古墳に対し畏敬の念を抱いていた当時の人々の心性の一端を垣間見ることができる。

おわりに

本稿で紹介したように、地震で被災した浅羽野1号墳（土屋神社古墳）の石室の修復が実施されたのが現在から約300年前の1707（宝永4）年であったという事実は注目に値する。また、それを後世に伝えたのが文献史料や地元の言い伝えではなく、施工した石工によって天井石に残され銘文である点も興味深い。地震国であるわが国では古墳が地震の被害を受け、その後修復された事例は多く存在すると思われるが、本古墳のようにその時期や施工者である石工名が判明している古墳は極めて稀であり、今回はその年代や石室内部の状況から地震災害に遭ったことが契機となって修復が実施されたと推測することができた。

1995（平成7）年の阪神淡路大震災を契機に「地震考古学」が注目され、2011（平成23）年の東日本大震災で多くの遺跡や文化財が被害を受けたが、本事例は改めて地震や火山噴火などの自然災害と遺跡の関係を探る視点が重要であることを再認識させるものであるとともに、被災した地元の古墳をめぐる約300年前の人々の意識や行動を知ることができる貴重な事例であると言える。

謝 辞

本稿を作成するにあたり、土屋神社氏子の方々、埼玉県郷土文化会の大圖口承会長、坂戸市教育委員会、坂戸市立歴史民俗資料館の諸氏・諸機関にお世話になりました。記して感謝致します。

引用・参考文献

- 浅羽野の歴史を知る会編『浅羽野史探訪』、2013年
蘆田伊人編『新編武蔵風土記稿 第8巻』雄山閣、1996年
安部立郎『入間郡誌』、川越謙愛堂、1912年
石尾和仁「中世社会と「古墳」」『真朱』第3号、1999年
上本進二「二伝寺砦遺跡の地震跡」『大地に刻まれた藤沢の歴史Ⅲ～弥生時代～』藤沢市教育委員会、2011年
江戸遺跡研究会編『災害と江戸時代』吉川弘文館、2009年
清野謙次『日本考古学・人類学史』岩波書店、1854・55年
埼玉県『埼玉県史 第1巻 先史原史時代』、1951年
埼玉県編『武蔵国郡村誌 第4巻』、1954年

- 斎藤 忠「古墳の祟り」『ドルメン』1巻8号、1932年
斎藤 忠『日本考古学史』吉川弘文館、1974年
坂戸市教育委員会編『坂戸市史 古代史料編』、1992年
櫻井準也「遺跡・遺物観の系譜―「過去」の遺跡・遺物の取り扱いをめぐって―」『史学』第70巻2号、2001年
櫻井準也『歴史に語られた遺跡・遺物 認識と利用の系譜』慶應義塾大学出版会、2011年
寒川 旭『地震考古学』中公新書、1992年
寒川 旭『地震の日本史』中公新書、2007年
塩野 博『埼玉の古墳 [北足立・入間]』さきたま出版会、2004年
鈴木 茂編「七沢石」『厚木市文化財調査報告書第13集 野だちの石造物』厚木市教育委員会、1972年
千葉隆司「小田氏の仏教と中世墓」『姿良岐考古』第27号、2005年
内務省地理局編『大日本國誌 武蔵国 第4巻』ゆまに書房、1988年
中村和男『播磨の石棺と石棺仏』神戸新聞総合出版センター、2012年
府中市郷土の森博物館『あすか時代の古墳 検証！ 府中発見の上門下方墳』、2006年

